

「あなたでお話しするのを最後にしようと思うの」。広島の「原爆の日」に合わせて、被爆者の高蔵信子さん（90）を広島市内の自宅で取材した時、帰り際の一言がずしりと響いた。

高蔵さんは、爆心地からわずか二百六十メートルという極めて近い銀行

消えゆく体験

もくじ
目録

の屋内で被爆し、生き残った数少ない一人だ。通勤時間で混み合っていたはずの街は人影が消えていた。代わりに何重にも折り重なった遺体。恐ろしい体験は、圧倒的な説得力を持っていた。

命は救われたが、原爆は今も体をむしばんでいる。「造血組織が破壊されててね。最近話をするのがつらいのよ」
被爆者の平均年齢は八十歳を超えた。遠くない時期に被爆者の言葉が聞けなくなる日が来る。その時、原爆の恐ろしさを実感できるだろうか。高蔵さんの言葉に身震いした。

（安福晋一郎）